
A Dream come true the DREAM

マッシゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Dream come true the DREAM

【Nコード】

N9520J

【作者名】

マツシゆ

【あらすじ】

人生には「夢」がある。様々な「夢」。「夢」は「夢」を叶えてくれる。

ただし、それとは引き換えに・・・??

あなたは「夢」を見ますか？

そしてあなたは「夢」を持っていますか？

本当に「人」の「夢」は儚いものなのか・・・

毎日何気なく眠ることが多分！楽しくなる物語。

・H a p p e n ・ 突然の出来事

こんばんは

夜の支配人、とまとです。

そう、ナイトじゃなくてとまとなんです。

もう一度言います、とまとなんです。

大事なことから二度でも三度でも言いますよ？

ちよつとね、夜の支配人とかゆうと、お水の世界かって思っちゃいますよね。（自重）

うん、題名見ろやって感じですよ。

はい、いつもう・ざ・い、なんて言われています。

さてツカミはおk！といったところで、

突然ですが、皆さんは「夢」を見ますか？

そして、皆さんに「夢」はありますか？

「夢」はあまり見ないなあという人は羨ましい限りです。

「夢」はまだないという人ももちろんいるでしょう。

「夢」がありすぎて迷っている。

一体自分は何に向いているのだろう・・・？

何にもなれなかったらどうしよう・・・

どうせ傷つくのなら、消えてしまいたい・・・

なんて思ってしまう人までいるのではないでしょうか？

もし、

「夢」をいくつも叶えることが出来たらあなたは どうしますか？
そして、その代わり……………

また、 やってしまった……………

嗚呼、カーテンが白くなるほどに照らされている。
どうしてこんなに痛いのだろう。

こんなに寝たのに……

口内炎、

醜い口内炎よ、あなたはどうして開いていくの？

鏡でおれた私の唇なんぞ見たくない。

まあ……、歯ブラシもせずただ寝ただけではそりゃ治らない……
つか……。

疲労回復のために寝たはずの体、

今日はよく寝て明日からまた頑張ればいいと思った私、

それを止めるどころか、どこのお水よりもお誘い上手な布団とベッド、（再自重）

わかりきった後悔が、少し寝違えた右肩をさらに重くする。

でも……あれは楽しかった。

なんだろう……鮮明には思い出せないのに……

どうしてか、断片的な白いもやがかかったショートムービーを
もう一度立ちあげられる気がする。

一体なにがしたかったのだろうあの鬼は……

自分だけが知っている秘密のような気がして、少し心の中でクスツ
と笑ってみたりする。

また見たいなあ……本当に見たい……
バルサミコ酢か……クスツ……

朝ご飯と昼ご飯と一緒に食べる私。

正確に言つと、お茶碗一杯のうち約3割が朝で、残りがお昼。
海苔はもちろん朝。

しかしながら少しヘヴィなやきそばは、やはり昼。
残念ながらお味噌汁は昨日の残りのため圏外である。

一気に食べる私。

満腹になってテレビを見ながら横になっちゃう私。

やっぱりそのまま目を閉じちゃうよね？

我慢・・・出来ないよね？

こたつと満腹感には勝てない私。（ほんとしょつもなくてすいません。泣）

えええっ・・・

今日はこれえ・・・？

な、なに・・・？え、ええー・・・

あの場所だ。やっぱり、やってることはちょっと巻き戻した所から・

・・・じゃない！

今日のは、場所はハリボテで他の人がキーマンなんだ！

え、どうゆうこと・・・！？ええ~~~~~？

その時だった。

えっ・・・・・・・・・・・・・・・・

えっ？

何が起こったのか全くわからなかった。

ただ、一瞬だった。

今さっきまであった薄い風景が、一瞬にして消えた。とゆうより、塗りつぶされた。

そこにあつたのは・・・闇だった。

私は、完全に目を見開いていた。そしてはつきり起きているという意識があつた。

これは、なに・・・？

手が目を触れてもアイマスクなどない。誰かのいたずらなのだろうか、

でも、私は確かに温かいこたつのなかで寝ていた・・・はず。

じゃあ、どうして・・・？

どうして耳が聞こえない？

これが突発性の障害だったとしても、体からカーペットの柔らかさが伝わってくるはずだ、

電気やテレビのあの独特の音の気配がするはずなんだ。

なのに、一体これは・・・？

いきなり恐怖にかられた。異世界にでも閉じ込められたのだろうか。いやだ・・・怖い・・・ここから出して・・・早く戻りたいっ

両手で顔を塞いでも、景色は闇のままだった。

だがその瞬間・・・光が閃いた。

指の間から一瞬漏れた光。

中指と薬指の間だろうか、それとも人差し指？いや小指と薬指の間？いやいややっぱ人差し指！？

そんなこと・・・・・・・・・・どうでもよかった。

私は、とにかく前であろう方向に向かい全力で走った。
そして、

私は激怒した。
必ず、かの邪知暴虐の光を捕まえなければならぬと決意した。

・・・。

どれくらい走ったのだろう。

おかしい、体が全く疲れない。

昨日あんなに寝たからか・・・？

それとも今朝っ、いや・・・昼に食べたあの海苔のおかげなのか・・・？

風も感じないため、全く気持ちよくないが動いていることもわからなかった。

とにかく、この闇から消えたい、現実に戻りたい・・・その一心が私を走らせた。

すると、やや斜め左から「奥」が見えた。

光だ！！

私は「奥」の方向に足を変えた。

私の姿が見える。横目で腕が見える。母にごねて買ってもらったプーマ●のジャージ。

大好きなオレンジの線が光の色で薄くなる。

そうだ、このチーターのように私は走っているんだ。

ああ・・・帰れるんだ・・・ああ・・・。

そして私はやっと光に届いた。

だが、光の正体は、人だった。

はいはいはい、とゆーことで、「とまと」でっす。

え、ちよつと釣った感あつた？

すういませんっ、どうかどうか、荒らさないでくださいね。

んーで、これからが本番とゆうか、なんとゆうか・・・ですね

ん？次回はいつになるかって？・・・ちよまつ・・・

ん、んん、はいっ、はい、あはーい。

「多分まだ残ってるネタだからすぐ書ける」だてっw

じゃまそゆことみたいなんで、さいならっ。

- Reason - 世界の理由

黄色でも金色でもない。真っ白、という表現がこの場合正しいのだろうか

眩し過ぎるからか、顔や体の細部を見ることが出来なかった。

そして、光は巨人だった。

ただ見えたのは闇によって作られた輪郭だけ。

私は右手を顔の前にやり、指の隙間から巨人の足を見ていた。

なんてデカイ小指なんだ・・・私の拳程度の大きさか？

触ってみたいところなのだが、なんだか、あれほどまでに走った努力が無駄になりそうで、

巨人に賭けてみる気にはならなかった。

先ほどまで恐怖に駆られていた私は、どうしてここまで能天気なのだろうかとも思っていた。

と、その時。

「9分51秒ですか・・・やりますね・・・ふふ、なかなか面白い子だ」

・・・！

・・・聞こえた。

私は確かに音を聞きとった。

巨人が話したことに感動した？ちがう。

私は・・・・・・生きています。

ただそれだけが嬉しかった。

そして私は熱を感じた。

急に体が熱くなってきたのだ。凍った体を奥底からの熱が溶かすように。

下半身から上半身へと濃いエネルギーが上昇していった。

っ！・・・・・・

しかし、それと同時にどつと重みも体にかかってきた。胸部からなにか押し上がってくるものが感じられた。

手を口にやる私。まだ20にもなっていないのに急に老けこむ私。そう私は直角になっている。綺麗な90度。

「あははは、やっぱり。まああれだけ走れば無理もない・・・・」音が聞こえたことに歓喜して気づかなかったが、巨人は喋っていたのか。

でも・・・・何か変だ。

私は巨人の声に何かしらの違和感を覚えた。

なんだろう・・・・どこかで聞いたことのあるような声。

低く、少しにごったような・・・

あ、風呂の栓を抜いた時に発する音・・・・？だけど・・・・あ、でも・・・・。

いつものあの情景が何故か非常に滑稽に見える。お風呂の栓を抜く私・・・・。

私は体を屈めながらもクスッと笑っていた。

「え、もしかして私、笑われている・・・・？」

体がぴくついた。そして私はこの後久しぶりに自分の声を聞いたとを感じる。

「あ、ご、ごめんなさい、・・・・お風呂の・・・・だなんて・・・・」

言葉と同時に体をゆっくりと起こし、口にいた手は顔の前で光を遮っていた。

「は？お風呂？？」

「あ、いや……、あ、あー……えと……あ、あの！私帰りたいんです！！」

「ほ……ほう、単刀直入にきましたか。ふふ。おもしろい……」
「……??……あ、あの、ここは一体なんなんですか？私……死んでないですよね……？」

「うん……うんうん。いい。……え、あはい。」

顔がやはり見えない。そこからいささか読み取れる心の言葉もちろんわからなかった。

「そつか……そ、それで……あなたは一体……？」

「私は、漠の鼻協会の一人、ライト＝オブサブと申します。ずっと眩しくさせてごめんなさい。このほうがあなたを観察しやすいのですよ。ちよつと待ってくださいね……ふんっ！！」

その瞬間、なんとかたんだらとかゆう巨人の輪郭が切断され（覚えてあげてーっ byとまと）

腰あたりであろう部分から巨人の体が2つ、4つ、16と、数に比例してみるみる小さくなっていく四角い光が、私の視覚を埋め尽くした。光の強さが少し弱くなったようにも見えた私はようやく両目で元は巨人だったその光を見ることが出来た。

「ん……んはっ！！」

き、きもい……と思ったことを反省しなければならぬ。

あの光も音もない、生きているのかもわからない恐怖をつくる闇は、星空へと変わったからだ。

私の眼に映っていた光のドットは巨人の掛け声とともに光の線をなして辺りにちらばっていった。

いつしか私を襲った疲労感や嘔吐感さえも、なくなっていた。

「いやいや、あなたの生命力には驚きましたよ。」

といいながら、ライトは私の足元から闇だけを吸い取り、体をつく

りあげた。

すらりとした長身で、私より小顔だった。（むか）

全体を黒でまとめられている。黒いスーツに黒靴。

透き通った眼の輝きに私はすこしドキつとした。

でも何だろう・・・、少し心の奥になにかがひっかかっている気がした。

「こんにちは。改めまして、ナイトⅡオブサブと申します。」

私は二歩ほど後ろに下がり、今度ははっきりと言った。

「あの、私はなんでここにいますか？」

「あなたは・・・とっても幸運な人なのですよ」

「幸運・・・？」

ライトは服を少し整えながら続けた。

「そう、幸運。とってもラッキー。この世界は死の世界でもはざまの世界でもない。むしろ幸せな世界なんですよ。」

「幸せな世界・・・？」

私が小声でそう言うと、ライトは自分の姿が作り上げた星空を見ながらこう言った。

「あなたは、この世界に引き込まれた時確かにあなたは目を見開き、起きた出来事に慌てふためき恐怖をも感じた。確かにそれは、どの者にも通ずること。引き込まれるという事までですが・・・。しかし、そこからこの世界に気づき感情を持つという例はあまり見ないのですよ。」

「・・・???じゃあ、この世界に飛ばされる人はたくさんいるってことですか・・・？」

「おほっ・・・うんうん、そうですね。物語のつなぎとしては最高の発言だ。思っていたより知能は高いようですね。ふふ」

「は?・・・あ!？」

「あいや、こつちの話です。（にこ）そうですね、あなたの言った通りです。あなた以外に多くの人間がこの世界に飛ばされる。そう。

結構！さあ赤の方、何番っ！」

なんだろう、さっきからチヨイチヨイ腹が立つ。

「でも、見る限りここには私とあなた以外に誰もいませんよ……ね？」

「人がボケているのに無視ですか……。はあ……。いや、元氣出せ俺っ……」

そ、そうですね（にこ）、まあそれはおいおい話すしましょう。それにしても、あなたはとても足が速いですね。ぶっちゃけ驚いたっし。」

「いちお、運動部なんで……」

「そうなんですか……。……って言って、それについて話は広げませんよ？ふふ。そろそろ本題に入らないと、読者が飛ばしそうですからね。」

「は、はあ……。」

だめだ、かみ合わない。

……これが同じクラスのにな川なら背中を蹴っ……！

「3：7。この割合、なんだと思いますか？」

「え、……。……ご飯……？」

私は少しくだけた笑みになった。

「あはは、そうですね。確かに。あなたが今日食べたことになるお茶碗一杯の割合と同様、この割合は、この世界に飛ばされた人間が諦めるか生き求めるかの違いなんです。幸運にもあなたと同じく、この世界に気づいたわずかな人間でさえ、私が発する光を求めようとしないうちにもいるのです。あなたのように走ってはこない人間。恐怖に怯え動けないでいる人間。そのまま横になって再び眠る人間までも……」

ライトは、私の担任のようにゆっくり歩き回りながら説明した。私はなんだか遠まわしに幼稚と言われている気がした。

「この世界に迷い込んだ人間に対して必ず私は光を放ちます。そして上から人間がとる行動を観察し、ここにたどり着くまでの時間を計測する。それが私の仕事なのです。ちなみにあなたは9分51秒でした。そして大いにあなたの生きる力を感じた。」

ライトが少し微笑んでいるように見えた。私もすこし微笑していた。

「この世界は一体何か、あなたは先ほど問いました。」

「はい。未だにわかりません。なぜ私はここにいるのか・・・、どうして幸運なのかも・・・」

「この世界に気づくもの・・・それは心の奥深く底に夢があるから。」

「

「！」

私は体が一瞬止まった

「あなたは、何か誰にも言えない夢があるのではないですか？」

「・・・・・・・・・・。」

「ふふ、いいですよ、口に出さなくても。それに、本当に夢がなくても構いません。自分の夢に気づかない人もたくさんいましたしね。」

「

記憶の端に隠したはずの冷たいもやが、一瞬私の心を突き抜けた。

「この世界に飛ばされる条件はもちろんあります。日ごとによって変わるのですが、今回は朝と昼のご飯と一緒に食べ、お昼寝をするといった事でした。そしてあなたは見事この世界に気づき、30分以内に私の光に辿り着いた。」

「でも、それでは全然幸運とは言えないですよね・・・？」

「そうですね、ですがここにただし書きがありまして、
*ただし、炭水化物で炭水化物のメニューであること

というのが、今回の条件なんです。どうですか、めっさ幸運だと思います
いませんか？」

「いや……………そこまで……………」

「ucci……………せっかく前後のつながりを良くしようと練りに練った
アイデアなのに……………少しはのれよっ！くそっっ！」

「……………。それで、私は帰れるんですか？」

少し低めで気だるげに言った。

「もちろん。ですが、ここまで辿り着いた者にはある特典があります。
」

「？」

「夢を叶えること。」

「！！！」

通り抜けた冷たいもやが一瞬にして消えたように感じた。

「ですが、その代わりに必要なものがあります。」

「……………」

「一度あなたを現実へと戻します。残念ですが、この時点ではそれが
何か、まだ言うてはいけないきまりですので……………。それからど
うするか、それはあなた次第です。」

「……………。でもどうやって……………？また、炭水化物とか
昼寝とか……………ですか……………」

「あはは、いえ違います。それに今度来る時は今回のように走らな
くても大丈夫ですよ。」

条件を聞いてもないのに何故か安心した私。

「では、条件を言います。一つ目は深夜2時に就寝。まあ、これは
2時頃でも大丈夫でしょう。うん。」

そして二つ目として、片手に携帯電話を持っていること、です。ただしここから大事です！

いいですか？必ず、電源をONにしてください。切っただけでは意味がないですよ。もし、何の変化もなく朝起きてしまったら、また繰り返し試みて下さい。何かズレているか・・・もしくは・・・

「

もしかして？」

「んまあここはあえて言わない方が読者のためになるかと。」

「は？」

「まあそういったところです。わかりましたね？」

「は、はい・・・。」

「では、現実へと戻します。眼を瞑ってください。」

「あ・・・はい。」

そう言われて私は、ゆっくりと眼を瞑った。その瞬間・・・

何か臭った。やべえまじ臭い。なにこれ。異臭に耐えられなくなつた私はまぶたを開けた。

はいはいはーい、こんばんわ、とまとです。

話だいぶ進みましたね。そしてまさかのライト〃オブセブの登場。オブセブは皆さん何が元わかりましたか？

うんっ、「観察」を和英辞書で調べるやって感じですかね。

調べたところでね、ちよつと無理があるっ・・・と思われるのがオチなんですけどね！！

そういえば、現代の世界の眠りにはレム睡眠とノンレム睡眠があるそうです。

ライトが言っていた世界は、もしかしたら夢を見ていないノンレム睡眠なのかもしれませんね。

さて、次回の投稿はいつになるのでしょうかっ！ちよつと聞いてみましょう。

あの・・・・・・なんですけど・・・、え？あはい、あははっ、ですよね！

「ネタが切れてきた。てかあんま見てないんなら投稿せんでもよくね？」やてっw

ちよまてっっ、わいの仕事なくなるやろがっ　ってとこですよね！では、今日はそんなところで！さいならー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520j/>

A Dream come true the DREAM

2010年12月10日22時02分発行